

【授業科目】 実践解剖生理学 Practical Anatomical Physiology

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開								
高崎昭彦、杉浦諭、榎本喜彦 金田泰代、伊藤康宏	3年次前期	必修	1	15	講義	あり	巻末掲載	可								
授業概要 (内容と進め方) 及び課題に対する フィードバック方法	<p>実践解剖生理学では、人体の基本的構造と生体への機能や仕組みの要因や現象について演習を交え実践的に教授する。具体的には、ヒトの生理学、感覚の機能を理解するため、血圧・心拍数の測定や盲斑の検出、皮膚感覚として痛みの測定や棒反応の測定を行う。生体の反応やメカニズムを理解するため、生理機能検査学に繋がる心電図、呼吸機能、針電極による筋電図・脳波の検査について演習するほか、内視鏡による検体採取、肛門からの検体採取、静脈路確保、造影剤注入、血液成分採血について演習し、臨床検査に対する理解を深める。また、生体検査全般の検体採取法として、咽頭・鼻腔からの検体採取、口腔内喀痰吸引の知識、技術についても教授する。</p> <p>(オムニバス方式/全8回) レポート・課題に対するフィードバック方法：レポートはコメントを付けて返却し、課題については、担当教員からフィードバックする。</p>															
実務経験に関する 授業内容	臨床検査技師としての臨床経験を持つ教員が、実務経験での経験や、演習形式の実技に関する内容も同時に教授する。															
授業の 位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる。」の達成に寄与している。															
到達目標 (履修者が到達 すべき目標)	<p>①生体の生理的機能とメカニズムについて説明できる。</p> <p>②刺激に対して適正な反応を示すことによって恒常性の維持に寄与していることを説明できる。</p> <p>③静脈採血、および皮膚、咽頭・口腔、鼻腔、吸引痰、肛門、内視鏡からの検体採取など、各種検体採取法について説明できる。</p> <p>④持続皮下グルコース検査、静脈路確保、造影剤注入、血液成分採血、直腸肛門機能検査、誘発電位（体性感覚誘発電位、運動誘発電位）など臨床検査技師として新たな業務について説明できる。</p>															
時間外学習に 必要な学修内容 および 学習上の助言	<p>臨床検査技師に求められる新たな知識・技術であるため、しっかり学習し理解してほしい。 あらかじめ資料を読み、内容を理解したうえで、手順の方法を確認しておくこと。 講義内容で不明な点は教員へ質問し、問題を解決しておくことが望ましい。 事前学習および事後学修：プリントなどから要点をまとめておく（各回 1 時間）</p> <p>※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（2単位15回科目の場合：予習+復習4時間/1回）（1単位15回科目の場合：予習+復習1時間/1回）（1単位8回科目の場合：予習+復習4時間/1回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。</p>															
授業計画	第1回 持続皮下グルコース検査	高崎	第2回 静脈採血、静脈路確保、造影剤注入法	高崎	第3回 血液成分採血法	杉浦	第4回 血圧・感覚機能の測定	金田	第5回 皮膚、咽頭・口腔、鼻腔からの検体採取、口腔内喀痰吸引	金田	第6回 心電図、呼吸機能検査、針筋電図、針電極脳波、味覚検査、嗅覚検査	伊藤	第7回 肛門からの検体採取、直腸肛門機能検査	伊藤	第8回 誘発電位(体性感覚誘発電位、運動誘発電位)、内視鏡による検体採取法	榎本
価方法評 価基準	成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。 定期試験 90% 課題及び小テスト 10%															
教科書	諏訪部章、高木康、松本哲哉編『医療安全管理学』医歯薬出版 他にプリントを配付する。			参考書等	なし											
学生への メッセージ	これまでは法規上、臨床検査技師が携わってこなかった領域を多く含むため、新たな領域として医療現場で期待されている。採血と生理機能検査学実習以外では、人の体に直接触れ、そこから検体を採取することは少なかったため、臨床という意味の重みを感じるように学んでほしい。															